

〔「四季探訪」展によせて〕

さりげなさとユーモアと古典学習

テレビの朝晩の天気予報で、春は梅や桜、秋は紅葉の見頃を、それぞれ開花前線や紅葉前線を記入した地図まで作って、これほど熱心に話題にする国というのは、世界中にいったいどれくらいあるのでしょうか。

古今和歌集の収録歌の部立てに、春歌、夏歌、秋歌、冬歌というものがあるように、四季は日本文学に深く根を下ろしています。そして、和歌と不即不離の関係を結んで描かれてきた絵画にも、はやくから四季絵、あるいは月次絵(十二ヶ月の絵)というものが描かれてきました。といっても、確証のある平安時代の四季絵の作品は一点もありません。では、どうして四季絵や月次絵が描かれていたとわかるのかといえば、それは、絵によせて詠まれた和歌が大量に残されているからです。その内容から、画面を復元的に想像する方法で平安時代の四季絵の研究は進められてきました。平安時代の四季絵とは、数面にわたる襖や屏風に、季節の行事や草花、鳥や動物、人々のさまざまなわいを、ちりばめるように描くものであったようです。

本展では、そのような平安時代

以来連綿と続く四季絵の伝統を、江戸時代の絵画に探ります。江戸時代の絵画の季節表現には、江戸時代ならではの風情があります。それは、蕪村の俳句に感じられる、慎ましい生活のなかに根をおろした季節感といえよいでしょうか。たとえば、平安時代の「秋きぬと目にはさやかにみえねども 風のおとにぞおどろかれぬる」という雅びで格調高い秋の秀歌が、江戸時代の蕪村の手にかかると「秋きぬと合点させたる噓(くさめ＝くしゃみ)かな」という、俗っぽく、滑稽で、しかもだれしも経験したことのある情景を詠んだ一句に変換されていることなどが思い浮かびます。

平凡な暮らしのなかの一コマから、夏のひざしの強さや、冬の空の暗さ、そして肌に感じられる大気の感触まで絵にしてしまうのが、江戸時代の絵画です。それは、単に庶民的な感性が前面に出てきたというだけではなく、そうした気象の変化や大気の感触をとらえようとする感受性と、それを描き表すテクニックを、江戸時代の絵師たちが獲得したということだと思います。

たとえば、俵屋宗達の落款のある「桜図」(図1)をみてみましょう。古来、春たけなわの桜といえば、正面向きの満開の桜花をスタンプで、この絵の桜は、振り返ったら、そこに

桜が静かに咲いていた、というような、さりげなさが印象的です。中部義隆氏は、この図と酷似する桜の絵を、酒井抱一が編んだ『光琳百図』にみつくて、このタイプの桜の絵が、宗達、光琳、抱一と、琳派の絵師の間で描き継がれていた可能性を指摘しています(1)。それは、この楚々とした桜の絵が、江戸時代の人々の好みに合致していたことを示すものなのでしょう。抱一は、このような桜の絵を「夜の桜」と呼んでいました。たしかに、絵の中には、宵闇せまるたそがれどきのおぼろな光が感じられます。

この展覧会は、晩秋から冬にかけての時期に開かれることになりませんが、秋の絵として展示する作品のひとつに、馬上から女郎花を手折ろうとして落馬する高僧を描いた英一蝶の「僧正遍昭落馬図」(図2)があります。古今和歌集収録の遍昭の歌にもとづく絵です。「名にめでて折れるばかりぞ女郎花 我落ちにきと人にかたるな」、名前に女という字が使われていることに心ひかれて手折ってみただけだよ、私が女に迷って墮落した、などと人と言わないでくれよ、というちょっと弁解がましい歌です。その「我落ちにき」を、花を折ろうと手をのばした拍子に落馬したと、墮落と落馬を重ねる解釈が古くからあり、狩野探幽も似たような絵を描いています(2)。しかし、一蝶のこの作品のほうが、遍昭の必死の形相や、大きくくまれのあがった衣、そこからのぞく白足袋をはいた足がむなしく宙をかくありさまを克明に

とらえていることにくわえ、手綱の主を失っても、我関せずとばかりに駆け足を止めようとしないう馬など、探幽画よりもはるかに滑稽に描かれています。高僧の人間臭い失態を、笑いに包んで許しているともいえます。

そして、平安時代の四季絵の復興をめざした岡田為恭が、古書や古画を山ほど勉強して描きあげた春と秋の二季の絵「春秋鷹狩茸狩図屏風」(図3)も展示いたします。この屏風絵は為恭の古典研究のたまものです。しかし、ここにみる、ひろびろとした空間表現は近代的なもので、どうみても為恭がめざした平安風ではなく、それどころか時代の最先端をいくものです。絵師にかぎらず、人は、その人の生きた時代の思潮と無縁ではありえないことを示す一例かもしれません。

(泉万里)

(1) 中部義隆「俵屋宗達筆 桜図について」『近世絵画研究 大和文華館所蔵品を中心に』大和文華館 2018年(初出は『美のたより』97号 1991年)

(2) 中部義隆「僧正遍昭落馬図」『大和文華』104号 2000年



図1 桜図



図2 英一蝶筆 僧正遍昭落馬図

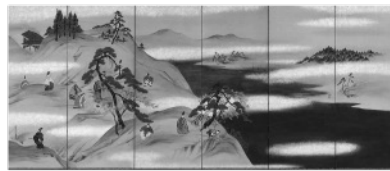
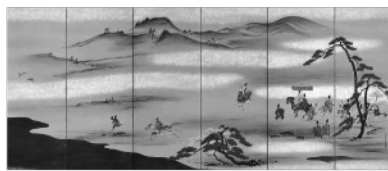


図3 岡田為恭筆 春秋鷹狩茸狩図屏風



季刊 美のたより No.204

平成30年 10月 1日

発行 大和文華館